

012

日蓮大聖人御書全集

ししんごほんしょう

四信五品抄

新版
264
S
271

ししんごほんしょう

四信五品抄

建治 3 年 ('77)

4 月 10 日

56 歳

富木常忍

ときじょうにん

青鳩一結、送り給び候い了わんぬ。

今來の學者一同の御存知に云わく「在世・滅後異なりといえども、法華を修行するには必ず三學を具す。一つを欠いても成ぜず」云々。

余また年來この義を存するところ、一代聖教はしばらくこれを置く、法華經に入つてこの義を見聞するに、序・正の二段はしばらくこれを置く、流通の一段は末法の明鏡にだん

え ゆう る つ う ふ た
なり、もつとも依用となすべし。しかして、流通において二
つ有り。一には、いわゆる迹門の中の法師等の五品なり。
に あ いち
二には、いわゆる本門の中の分別功德の半品より経を終わ
るまで十一品半なり。この十一品半と五品と合わせて
十六品半、この中に末法に入つて法華を修行する相貌
分明なり。これにお事行かずんば、普賢經・涅槃經等を
引き来つてこれを糾明せんに、その隠れなきか。
その中に、分別功德品の四信と五品とは、法華を修行す
るの大要、在世・滅後の龜鏡なり。荊溪云わく「一念信解と
たい よう さ い セ め つ ご き き よう
なか ふんべつくどくほん し しん ご ほん
ひ き た
かく
ほ つ け し ゆ ぎ よう
そ う み よう
こと ゆ
ふ げ ん ぎ よう ね は ん ぎ よう と う
ま つ ぽ う い
な か
じ ゆ う い つ ほ ん は ん
ほ ん も ん な か ふ ん べ つ く ど く は ん ほ ん
き ょ う お
ご ほ ん
あ
し ゃ く も ん な か ほ つ し と う
ご ほ ん
き ょ う
お

すなわ

ほんもんりゅうぎょう

はじめ

うんぬん

なか

げんざい

は、即ちこれ本門立行の首なり」云々。その中に現在の四信の初めの一念信解と滅後の五品の第一の初隨喜と、この二処は一同に百界千如・一念三千の宝篋、十方三世の諸仏の出する門なり。

てんだい

みょうらく

ふた

しようけん

にしょ

くらい

きだ

天台・妙樂の一りの聖賢、この二処の位を定むるに、

みつ

しゃくあ

三つの釈有り。いわゆる、あるいは相似・十信・鉄輪の位、

かんぎょうごほん

しょほん

くらい

そうじ

じっしん

てつりん

くらい

みだんけんじ

あるいは觀行五品の初品の位にして未斷見思、あるいは

みょうじそく

くらい

しかん

ふじよう

え

い

ぶついし

名字即の位なり。止觀にその不定を会して云わく「仏意知

がた

き

おもむ

いせつ

か

かいげ

なん

り難し。機に赴いて異説す。これを借りて開解せば、何ぞ

わづら

勞わしく苦ろに諍わん」云々等。

ねんご

あらそ

うんぬんとう

予が意に云わく、三つの釈の中、名字即は経文に叶う

めつご

ごほん

はじ

いっぽん

と

い

もん

そうじ

ごほん

わた

か。滅後の五品の初めの一品を説いて云わく「しかも毀皆せずして、隨喜の心を起こす」。もしこの文、相似・五品に渡

きし

ことば

びん

らば、「しかも毀皆せずして」の言は便ならざるか。なか

じゅりようほん

しつしん

ふしつしん

とう

みな

みょうじそく

んずく寿量品の「失心、不失心」等は、皆、名字即なり。

ねはんぎょう

しん

しん

ないしきれん

しん

涅槃經に「もしさ信するも、もしさ信ぜざるも乃至熙連

かんが

いちねんしんげ

しじ

うち

ないしきれん

とあり。これを勘えよ。また「一念信解」の四字の中の「信

いちじ

しじん

はじ

こ

げ

いちじ

のち

うば

の一字は四信の初めに居し、「解」の一字は後に奪わるるが

ゆえ

む げ う し し し し し い あ

き よ う

き よ う

故なり。もししからば、無解有信は四信の初位に当たる。經
に第二信を説いて云わく「略解言趣」云々。記の九に云わ
く「ただ初信のみを除く。初めは解無きが故に」。したがつ
て、次下の隨喜品に至つて、上の初隨喜を重ねてこれを
分明にす。五十人これ皆展転して劣るなり。第五十人に至
つて二つの釈有り。一には、謂わく「第五十人は初隨喜の
内なり」。二には、謂わく「第五十人は初隨喜の外なり」と
いうは名字即なり。「教いよいよ実なれば位いよいよ下し」
といふ釈は、この意なり。四味三教よりも円教は機を摂

にぜん えんぎょう ほけきょう き おさ しゃくもん ほんもん
め、爾前の円教よりも法華經は機を摂め、迹門よりも本門
は機を尽くすなり。「教弥實位弥下（教いよいよ実なれば
位いよいよ下し）」の六字、心を留めて案ずべし。
と まつぱう い しょしん ぎょうじや かなら えん さんがく ぐ
問う。末法に入つて初心の行者、必ず円の三学を具す
るや不や。

こた い ぎだいじ ゆえ きょうもん かんが い
答えて曰わく、この義大事たるが故に、經文を勘え出だ
して貴辺に送付す。いわゆる五品の初・二・三品には、仏
正しく戒・定の二法を制止して、一向に慧の一分に限る。
まき かい じょう にほう せいし ごほん しょ に さんぽん いっこう え いちぶん かぎ
慧また堪えざれば、信をもつて慧に代え、信の一字を詮と
え か しん いちじ せん

なす。

不信は一闡提・謗法の因、信は慧の因、名字即の位

なり。

天台云わく「もし相似の益ならば、生を隔つるも忘

れず。名字・觀行の益ならば、生を隔つれば即ち忘れ、

あるいは忘れざるも有り。忘るる者も、もし知識に値わば

宿善還つて生ず、もし悪友に値わば則ち本心を失う」

云々。恐らくは、中古の天台宗の慈覚・智証の両大師も、

天台・伝教の善知識に違背して、心は無畏・不空等の悪友

に遷れり。末代の学者、惠心の往生要集の序に狂惑せら

れて、法華の本心を失い、弥陀の權門に入る。退大取小の

もの かこ おも みらいむしゅこう ふ
者なり。過去をもつてこれを惟うに、未來無數劫を経るも、
さんあくどう しょ あくゅう あ すなわ ほんしん うしな
三悪道に処せん。「もし悪友に值わば則ち本心を失う」と
は、これなり。

と
問うて曰わく、その証いかん。

こた
い
と
答えて曰わく、止觀の第六に云わく「前教にその位を高
しかん だいろく い
くする所以は、方便の説なればなり。円教の位下きは、
しんじつ せつ ほうべん せつ
ぜんきょう くらいい たか

真実の説なればなり」。弘決に云わく『前教』より下は、
まさ ごんじつ はん きょう
正しく権実を判ず。教いよいよ実なれば位いよいよ下く、
ひく
きよう

教いよいよ権なれば位いよいよ高きが故に。また記の九
くらいい たか ゆえ
きよう

に云わく「位を判ずとは、観境いよいよ深く実位いよいよ下きを顯す」云々。他宗はしばらくこれを置く、天台一門の学者等、何ぞ「実位いよいよ下し」の釈を閣いて恵心僧都の筆を用いるや。畏・智・空と覺・証とのことは、追つてこれを習え。大事なり、大事なり、一閻浮提第一の大事なり。心有らん人は聞いて後に我を外め。

問うて云わく、末代初心の行者に、何物をか制止するや。答えて曰わく、檀・戒等の五度を制止して一向に南無妙法蓮華経と称えしむるを、一念信解・初隨喜の氣分と

なすなり。これ則ちこの経の本意なり。

疑つて云わく、この義いまだ見聞せず。心を驚かし、耳を迷わす。明らかに証文を引いて、請う、苦ろにこれを示せ。

答えて曰わく、経に云わく「我がためにまた塔寺を起て、および僧坊を作り、四事をもつて衆僧を供養することを須いづ」。この経文、明らかに初心の行者に檀・戒等の五度を制止する文なり。

疑つて云わく、汝が引くところの経文は、ただ寺塔と

衆僧とばかりを制止して、いまだ諸の戒等に及ばざるか。
せいし もろもろ かいとう およ
しゅそう

答えて曰わく、初めを挙げて後を略す。
こた はじ あ のち りやく

問うて曰わく、何をもつてこれを知らん。
こた なに し

答えて曰わく、次下の第四品の経文に云わく「いわんや、
つぎしも だいしほん きょうもん
ひとあ よ きょう たも か ふせ じかいとう

また人有つて、能くこの経を持ち、兼ねて布施・持戒等を
ぎょう うんぬん きょうもんふんみょう しょ に さんぽん ひと
かいとう ごど せいし だいしほん いた はじ じかいとう

行ぜんをや」云々。経文分明に初・二・三品の人には檀・
ゆる ひと だん

戒等の五度を制止し、第四品に至つて始めてこれを許す。後
ゆる のち はじ せい

に許すをもつて知んぬ、初めは制することを。

と い きょうもん いちおう あいに
しょしゃくあ

問うて曰わく、経文、一往、相似たり。はたまた疏釈有

りや。

答えて曰わく、汝が尋ぬるところの釈とは、月氏の四依の論か、はたまた漢土・日本の人師の書か。本を捨てて末を尋ね、体を離れて影を求め、源を忘れて流れを貴ぶ。分明なる経文を閣いて、論釈を請い尋ぬ。本経に相違する末釈有らば、本経を捨てて末釈に付くべきか。

しかりといえども、好みに随つてこれを示さん。文句の九に云わく「初心は縁に紛動せられて正業を修するを妨げんことを畏る。直ちに専らこの経を持つは、即ち

じょうくよう　じ　　はい　　り　　そん　　やく　　ぐ　　た
上供養なり。事を廢して理を存するは、益するところ弘多なり。
り」。この釈に「縁」と云うは、五度なり。初心の者兼ね
て五度を行すれば、正業の信を妨ぐるなり。譬えば、
小船に財を積んで海を渡るに、財とともに没するがごと
し。「直ちに専らこの経を持つ」と云うは、一経に亘る
にあらず。専ら題目を持つて余文を雜えず。なお一経の
読誦をも許さず。いかにいわんや五度をや。「事を廢して理
を存す」と云うは、戒等の事を捨てて、題目の理を専らに
す云々。「益するところ弘多なり」とは、初心の者、諸行と

だいもく

なら
ぎょう

やく

まつた

うしな

うんぬん

題目とを並び行すれば、益するところ全く失う云々。

もんぐ
い

と

きょう
たも

すなわ

文句に云わく「問う。もししからば、經を持つは即ち
これ第一義戒なり。何が故ぞまた能く戒を持つ者と言うや。

こた

しょほん

あ

まさ

のち

なん

な

い

答う。これは初品を明かす。應に後をもつて難を作すべから
らず」等云々。当世の学者、この釈を見ずして、末代の愚人
をもつて南岳・天台の二聖に同ず。誤りの中の誤りなり。

みょうらくかさ

あ

い

と

妙楽重ねてこれを明かして云わく「『問う。もししから
ば』とは、もし事の塔および色身の骨を須いづんば、また応

じ
かい
たも

じ
とう

しきしん

こつ

もち

まさ

に事の戒を持つことを須いづ、乃至事の僧を供養すること

じ
かい

たも

もち

ないし
じ

そ

くよう

もち

とう うんぬん

でんぎょう だいし い

を須いざるべしやとなり」等云々。

伝教大師云わく

にひやくごじつかい

す

きょうだい しいちにん

「二百五十戒たちまちに捨て畢わんぬ」。

ただ教大師一人

のみに限るにあらず、鑑真の弟子の如宝・道忠ならびに

しちだいじとういいちどう

す

お

きょうだいし みらい いまし

七大寺等一同に捨て了わんぬ。また、教大師、未来を誠め

まつぱう なか

じかい ものあ

けい

いち

て云わく「末法の中を持戒の者有らば、これ怪異なり。市に

とらあ

虎有るがごとし。これ誰か信ずべき」云々。

となんじ なん いちねんさんぜん かんもん かんじん うんぬん

問う。汝、何ぞ、一念三千の觀門を勧進せず、ただ題目

だいもく

ばかりを唱えしむるや。

こた

い

にほん

にじ

ろくじゅうろつこく

おさ

つ

答えて曰わく、日本の二字に六十六国を摂め尽くして、

身を益す。耆婆が妙薬、誰か弁えてこれを服せん。水心
な
無けれども火を消す。火物を焼くに、あに覺り有らんや。
りゅうじゅ てんたいみな ひもの や さと あ
竜樹・天台皆この意なり。重ねて示すべし。
こうる かさ しめ
と なに ゆえ だいもく ばんぽう ふく
問う。何が故ぞ題目に万法を含むや。
こた しようあんい
答う。章安云わく「けだし、序王とは経の玄意を叙ぶ。
じよおう きょう げんい の
経の玄意は文の心を述ぶ。文の心は迹本に過ぎたるは
きょう げんい もん こころ の もん こころ しゃくほん す
なし」。妙楽云わく「法華の文の心を出だして諸教の所以
べん うんぬん じょくすいこころ な ほつけ もん こころ い しょきょう しょい
を弁ず」云々。濁水心無けれども、月を得て自ずから清め
す つき え おの はなき
り。草木雨を得るに、あに覺り有つて花かんや。
さと あ はなき

妙法蓮華經の五字は、經文にあらず、その義にあらず、
ただ一部の意なるのみ。初心の行者、その心を知らざれ
ども、しかもこれを行ずるに、自然に意に当たるなり。
問う。汝が弟子、一分の解無くして、ただ一口
南無妙法蓮華經と称うるものは、その位いかん。
答う。この人は、ただ四味三教の極位ならびに爾前の
円人に超過するのみにあらず、はたまた真言等の諸宗の
元祖、畏・儼・恩・藏・宣・摩・導等に勝出すること百千万億
倍なり。

請う、國中の諸人、我が末弟等を軽んずることなかれ。

進んで過去を尋ねれば、八十万億劫供養せし大菩薩なり。

あに熙連一恒の者にあらずや。退いて未来を論ずれば、

八十年の布施に超過して五十の功德を備うべし。天子の

襁褓に纏われ、大龍の始めて生ずるがごとし。蔑如する

ことなかれ、蔑如することなかれ。

妙樂云わく「もし惱乱する者は頭七分に破れ、供養す

ることあらん者は福十号に過ぐ」。優陀延王は賓豆盧尊者

を蔑如して七年の内に身を喪失し、相州は日蓮を流罪して

ひやくにち うち ひょうらん あ

百日の中に兵乱に遇えり。

経に云わく「もしまたこの

きょうてん

じゅじ

もの
み

経典を受持せん者を見て、その過悪を出ださば、もしさは実

ふじつ

ひと

げんせ

びやくらい

やまい

にもあれ、もしさは不実にもあれ、この人は現世に白癩の病

ないしもろもろ
あくじゅうびょう

ひと

げんせ

びやくらい

やまい

を得ん乃至諸の悪重病あるべし。また云わく「當に

まなこな

ひと

げんせ

びやくらい

やまい

世々に眼無かるべし」等云々。明心と円智とは現に白癩

とううんぬん
みょうしん

ひと

げんせ

びやくらい

やまい

を得、道阿弥は無眼の者と成りぬ。國中の疫病は「頭七分

わ

とく
おも

ひと

げんせ

びやくらい

やまい

に破る」なり。罰をもつて徳を惟うに、我が門人等は「福

じゅうごう

うたが

ひと

げんせ

びやくらい

やまい

十号に過ぐ」疑いなきものなり。

そ

にんのうさんじゅうだいきんめい

ぎよう

はじ

ぶつぱうわた

夫れ、人王三十代欽明の御宇に始めて仏法渡りしより

このかた

かんむ

ぎょう

いた

にじゅうだいにひやくよねん

あいだ

ろくしゅう

以来、桓武の御宇に至るまで、二十代二百余年の間、六宗

あ

有りといえども、仏法いまだ定まらず。ここに、延暦年中

ひと
しょうにんあ

くに
しゅつけん

ひと

ろくしゅう
きょうめい

えんりやくねんちゅう

に一りの聖人有つて、この国に出現せり。いわゆる伝教
大師これなり。この人、先より弘通せる六宗を糾明して

だいし
しちじ
でし

さき
ぐつう
えいざん
た

ほんじ

しょじ

七寺を弟子となし、ついに叡山を建てて本寺となし、諸寺を
取つて末寺となす。日本の仏法ただ一門のみなり。王法も二

つにあらず。法定まり国清めり。その功を論ぜば、源、「已

こんどう
もん
い

今当」の文より出でたり。

のち
こうぼう
じかく
ちしょう
さんだいし
じ
かんど
よ

その後、弘法・慈覚・智証の三大師、事を漢土に寄せて

「大日の三部は法華經に勝る」と謂い、あまつさえ教大師
の削るところの真言宗の宗の一字、これを副えて八宗と
云々。三人一同に勅宣を申し下して日本に弘通し、寺ごと
に法華經の義を破る。これひとえに、「已今當」の文を破ら
んとして、釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵と成りぬ。し
かる後、仏法漸く廃れ、王法次第に衰え、天照太神・
正八幡等の久住の守護神は力を失い、梵帝・四天は国を
去つて、すでに亡國と成らんとす。情有らん人、誰か傷み
嗟かざらんや。詮ずるところ、三大師の邪法の興る所は、

